ホイットマンの mysticism について

稲　垣　春　男*

W. Whitman's Mysticism

Haruo INAGAKI

要　旨

「草の葉」以下のホイットマンの諸作品の中にうかがわれる東洋的な諸性格を，インド古代思想における〈梵(ぼん)〉などを中心として観察し，ルソー，カント，ヘーゲル，エマソン等との関連も検討しつつ，彼の〈自然〉，〈宗教〉，〈死〉と〈生〉，〈愛〉，〈民主主義〉などにおける発想の背後に看取される〈神秘主義〉(mysticism) を取り上げてみたい。とくに彼の詩想と芭蕉の俳句の気韻にみられる類似性は，その表出のプロセスとともに注目されてよいと思われる。

Synopsis

Whitman's works, their pinnacle being Leaves of Grass, reveal a pervading Oriental characters between the lines here and there. Especially, the resemblance of both the poetic ideas and the process of expressing them between Whitman and Basho, the haiku poet, is quite noteworthy, I believe.

So I am going to observe these Oriental characters concentrating chiefly on the old Indian concepts such as "Brahma." Of course his philosophic relations with Rousseau, Kant, Hegel, Emerson and others must be considered simultaneously. After that, I will also clearify his MYSTICISM which develops together with his favorite themes, "Nature," "Religion," "Life and Death," "Love," and "Democracy" in his literary pursuit.

目　　次

〔序　論〕〈民主主義〉(Democracy)—世界主義(コスモポリタン)の詩人，ホイットマン
第 1 部　俳人芭蕉との，作品にみられる類似性
第 2 部　東洋的特性—瞑想(めいそう)—〈超絶主義〉(Transcendentalism)
第 3 部　〈自我〉(Self) の確立—〈自然〉(Nature) の友好性—〈死生観〉(Thanatopsis)
第 4 部　自然の創造力と生殖活動
第 5 部　「インドへの航路」(Passage to India)
〔結　論〕〈霊魂〉(Soul)—楽天的な自由詩人，ホイットマン

× × × × ×

〔序　論〕〈民主主義〉(Democracy)—世界主義(コスモポリタン)の詩人，ホイットマン

W. ホイットマン (Walt Whitman) が〈民主主義〉(Democracy) を標榜(ひょうぼう)する，いわゆる〈民衆詩人〉

* 教授　一般教科　英語

(the poet of the masses) であることは一般に知られている。

彼の唯一の詩集,「草の葉」(Leaves of Grass) は,〈アメリカ共和国〉(American Republic) と同様に一つの実験として考えられたものである。この中で,彼は科学や民主主義に対比されるような詩を確立したのである。この〈詩的記録〉(a poetical record) を残した彼を強力に支えているものは,やはりそのたくましい〈国際性〉(cosmopolitanism) であろう。民主主義にしても,自己を確立する個人主義と,万人を友愛の精神をもって盟(ちか)いあわせる宗教的要素を含むものとして,すなわち,あらゆる国土を,あらゆる種族を,一つの同胞に,一つの家族として結合させる粘着性をもつものとして賛美されるのである。

エズラ・パウンド (Ezra Pound) をして,"He is America. His crudity is an exceedingly stench, but he is America." と述懐させたアメリカそのもののホイットマン!だがその彼が祖国アメリカに示す強い愛情も,いわば国境を越えた人類救済の悲願と不即不離の関係を前提としているのである。例えば,

(America! I do not vaunt my love for you,
I have what I have.)[1]

(Song of the Broad-Axe, §9, ll. 184, 5)

と,誇示しない愛を深くアメリカに抱いた彼は,Starting from Paumanok (ポウマノクを出発して) では,人道主義者,前進する民族,自由人としてのアメリカ人に期待する詩人なのである。

Americans! conquerors! marches humanitarian!
Foremost! century marches! Libertad! masses!
For you a programme of chants.[2]

(§3, ll. 37–9)

Inscriptions (銘詩) 篇の中の To the States (合衆国に) では,自由を取りもどすためにアメリカを媒体として,地上のあらゆる国家,都市の住民に,"Resist much, obey little." といわれなき服従を拒否するように説得する。南北戦争の勝利は彼をして,合衆国の先導によって世界が一丸となり,民主主義に,そして光栄あふれる未来へと前進することを夢見させたのである。このような彼の姿,彼の発想こそは,東西両洋にわたるスケールの雄大さをもつ地球の詩人,世界の予言者のそれであった。

この傾向は,さらにはマナハッタの子にしてしかも宇宙の生命を宿す詩人,と自得せしめるスケールに拡大する。

Walt Whitman, a kosmos, of Manhattan the son,[3]

(Song of Myself, 24, l. 497)

Calamus (カラマス) 篇の中の For You O Democracy (君のために,おお,デモクラシーよ) で,神聖な牽引力もつ国土を建設するために,〈僚友の愛〉(the love of comrades) の歌を声をふるわせてうたう彼は,The Base of All Metaphysics (あらゆる形而上学の基礎) の中では,ギリシアやドイツの新旧の諸学説の中に,またキリストの深奥な教えのうちに,この友人間の牽引力が基礎的な位置をしめていることを理解する。

Yet underneath Socrates clearly see, and underneath Christ the
　　divine I see,
The dear love of man for his comrade, the attraction of friend to
　　friend,[4]

(ll. 11, 2)

それはカントをはじめ,フィヒテ,シェリングやヘーゲルの研究,解説の基礎となり,その究極的目的ともなるものである。そしてこの愛の共感はあこがれと思索の時間において,ドイツ,イタリア,フランス,スペイン,さらには遠く支那,ロシアや日本も含めた兄弟愛の幸福感をもたらすのである。このような国境を越えた人類愛の出発点には,すでに〈神秘主義〉(mysticism) の色彩を感ずることができるように思う。

This moment yearning and thoughtful sitting alone,
It seems to me there are other men in other lands yearning
　　and thoughtful,[5]

で始まる同じ Calamus 篇の7行の詩,This Moment Yearning and Thoughtful (憧憬(どうけい)と思索のこの時間) は,I know I should be happy with them. で終わっている。人類の共存共栄の可能性の確信である。

ホイットマンの〈神秘主義〉は常に彼の〈合理性〉(rationalism) より強かった。人間の霊魂にふさわしい，無辺際の宙宇的規模と活力性をもつ詩の確立を目指した彼は，つぎのように言っている。

> It almost seems as if poetry with cosmic and dynamic features of magnitude and limitlessness suitable to the human soul, were never possible before.[6]

いわば詩の領域における世界的，宇宙的軸の展開を試みたということであろう。

彼の思想形成にはたらきかけた時代的背景として，Floyd Stovall は次の点を指摘している。すなわち，個人の価値意識に目ざめた西方ヨーロッパの〈文芸復興〉(Renaissance)，17 世紀の合理主義と科学的知識の前進に根ざす民主主義的社会の確立に向かう動き，18世紀の知的，社会的啓蒙の時代，そして今や絶頂に達していた19世紀の〈経験主義〉(empiricism) などである。

こうして彼の思想を形作る幾つかの柱のうちでも，次の四つが主だったものとしてあげられる。

(1) 〈先験的〉(a priori) な改革の方法，歴史の無視を伴う〈進歩主義の哲学〉(the philosophy of progress)

(2) ルソー (Jean Jacques Rousseau) (1712–78) の革新的所論にうかがわれる，人間の〈生得的善〉(the innate greatness) への信仰と自然の理想化

(3) ヘーゲル (George Wilhelm Friedrich Hegel) (1770–1831) の矛盾と相克を越えて神聖な目的を指向する〈宇宙意識〉(a cosmic consciousness) の教義に代表される，ドイツ哲学の〈理想主義〉(idealism)

(4) 〈宇宙理性〉(cosmic reason) からは独立して，歴史的進化の過程によって決定される実在としての自然を，科学的に概念化すること[7]

これらは互助的成長もするが，相互の矛盾もあり，ホイットマンの作品のかもし出す曖昧性は，これらの諸要素の混在に胚胎するものと思われる。

彼は父方からウェールズの，そして母方からはオランダ，アイルランドの血統を受けついでいる。だからその欧米人的発想はその成長を囲繞(いじょう)せる人的環境からして当然であろう。[8] だが，神秘主義の観点からしてもうかがうことのできるその求心的，東洋的思索や霊感の発展は，彼の読書研究の所与であるとともに，大方はかの広大，未開発の北米の風土がしっかりとこの詩人の敏感な心に植えつけたものであろう。

第1部　俳人芭蕉との，作品にみられる類似性

彼の自然観照の東洋的幽玄性，一体感的な悟入の境地は，我が国の俳聖芭蕉 (正保元年—元禄7年) (1644—94) とよく近似するものを露呈しているように思われる。以下主だった作品を引用して考察してみよう。

「笈(おい)の小文(こふみ)」にある一句，「冬の日や馬上に氷る影法師」[9] は，11 月半ば罪を得た若者，杜国を見舞う途次における芭蕉の自己凝視からうまれた句であるが，そこに示された「いのち」と「まぼろし」の漂泊者的な一体感は，ホイットマンが，不断の成長と生死の循環的一体性をうたってつぎのように〈幻霊〉に呼びかけ，

> Ever the dim beginning,
> Ever the growth, the rounding of the circle,
> Ever the summit and the merge at last, (to surely start again,)
> Eidólons! eidólons!
>
> (ll. 9–12)

永遠の肉体の意図こそは，真の自我のあらわれなりとして，

> The only purport of the form thou art, the real I myself,
> An image, an eidólon.[10]
>
> (ll. 79, 80)

とうたうホイットマンの Eidólons (幻霊) (Inscriptions 篇) との類似性を思う。

山国らしいスローテンポで新春御慶のゴマンザイを楽んでいる「山里は万歳おそし梅の花」に見られる滑稽味は，Richard Chase が指摘している，[11] Song of Myself (私自身の歌) (55節より成る) の第44節，野球なら〈第7回〉(the seventh inning) にあたるところ，の第1行で，

> It is time to explain—let us <u>stand up</u>.[12] (下線は筆者)

と読者の笑いをさそうホイットマンのユーモアに通ずる。なおこの長篇詩の第7節は，

Has any one supposed it lucky to be born?[13] (下線は筆者)

で始まっている。ホイットマン自身も，

I pride myself being a real humorist underneath everything else.[14]

と述懐している。

× × × × ×

「ほととぎす声横たふや水の上」 これは元禄6年の晩春，猶子桃印没後の悲嘆の境地においての句であるが，ホイットマンの「ライラック・エレジー」といわれる，When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd (残りのライラックが戸口の庭に花咲くとき) で，リンカンの死を悼んで，〈血を吐く歌〉 (Song of the bleeding throat) をうたう〈孤独のつぐみ〉 (solitary thrush) に，また「猿蓑」の春の部に出ている一句，「闇の夜や巣をまどはして鳴く千鳥」における春の夜闇は，いくたびか〈死〉 (death) をささやく Out of the Cradle Endlessly Rocking (果てなくゆれる揺籃から) の中の海の永遠性，造化力に通じ，子を思う芭蕉の千鳥の鳴き声は，「もはや番いならず」 (two together no more) と，愛せるものを失った悲しみを絶叫する，アラバマからやって来た〈雄鳥〉 (he-bird) の鳴き声でもある。ともに大自然をつらぬいてその懐に帰ってゆくメロディである。

元禄4年の「嵯峨日記」に出ている，「麦の穂や泪に染て啼雲雀」，これも悠久の天地とその中で小さな生命を引き絞って啼く雲雀とのコントラストを示していて，同題の句意と考えられる。

元禄7年5月，51歳にして最後の旅に江戸をたつ時の餞別の句，「麦の穂を便りにつかむ別かな」[15] の麦にはカラマスの友情の連想もあり，Prayer of Columbus (コロンブスの祈り)，Autumn Rivulets (秋の小川) 篇，を思わせ，両者の体力の衰えを感じさせる。

この句より6年ほど前の貞享5年8月，信州の月の名所，更科姨捨山へ行ったときの句，「俤や姨ひとりなく月の友」も同類の発想とみられる。

また，「此秋は何で年よる雲に鳥」は，大阪で客死する2週間程前の芭蕉の句であるが，New Jersey (ニュージャージー) 州 Camden (キャムデン) に隠棲して，泥浴に悲愁をまぎらわすホイットマンの境地そのままである。

× × × × ×

ホイットマンの A Broadway Pageant (ブロードウェイの行列)，Birds of Passage (渡り鳥) 篇で，〈日本よりの自由人〉 (Libertad of Niphon) を歓迎する心境の向こうを張るものとして，芭蕉の「阿蘭陀も花に来にけり馬に鞍」という，大江戸の春に興じた句がある。俳聖壮年 (36歳以前) の才気あふれた句である。

その他ホイットマンの母への慕情を思わせる，「古さとや臍の緒に泣くとしのくれ」など枚挙にいとまなしの感を深くするのであるが，最後に一つ二つの類似性を取り上げて本論を進めたい。

芭蕉が善光寺でよんだ「月影や四門四宗も只一つ」[16] は，少年期のホイットマンのクェーカーリズムの宗教体験が，世界の諸宗教を併呑して自然崇拝的宗教性に帰一していく精神構造そのままである。そして伊勢から奈良へ出る道での蕉翁の一句，「春なれや名もなき山の薄霞」 (貞享2年，甲子吟行) は，名もなき路傍の一木一草から〈宇宙〉の核心に迫る〈白髯の詩人〉 (the gray poet)，ホイットマン，の心であると言えよう。

風羅坊の別号を有し，芭蕉を庵に植え，「旅人と我が名呼ばれん初時雨」 (貞享4年，江戸出発)，「病雁の夜寒に落ちて旅寝かな」 (元禄3年，堅田)[17] と吟じ，旅の俳諧を心掛けた芭蕉！

〈放浪者〉 (loafer) をもって任じ，カラマスを愛し，「草の葉」 (Leaves of Grass) に年輪を見出し，Passage to India (インドへの航路) を詩作し，霊魂の旅をうたい続けたホイットマン！

第2部　東洋的特性—瞑想—〈超絶主義〉(Transcendentalism)

ホイットマンが東洋思想に接触した過程としては，英訳書により直接にふれたことと，エマソンの著作を

通じて間接にふれたこととが考えられる。そして彼が最も魅力を感じながら自己の成長に大きく役立てていったものに,「観心観法」[18] の求心的性格を特色とする〈東洋的神秘主義〉(Oriental Mysticism) があった。

O Thou transcendent!
Nameless, the fibre and the breath,
Light of the light, shedding forth universes, thou centre of them,[19]

(Passage to India, § 8, ll. 194-6)

における神は,〈完全なる友愛〉(perfect comradeship) を体現するものであり,〈真実在の我〉(actual Me) であり,〈完全なる僚友愛〉(perfect comradeship) の実現を神に求め,[20] 宇宙の大規模をそのままに自己の規模とするものである。

I sing the songs of the glory of none, not God, sooner than I
sing the songs of the glory of you.[21]

(To You, l. 38)

とうたう彼にとっては,神は尊崇される対象としてではなく,自己のうちに,求心的方向において具現されるのである。真の神は理想的な人間のうちに姿を示す。かかる自己は存在する事物を包み込むものであり,〈完成された諸物の頂点〉(an acme of things accomplish'd) である。かかる自己あるいは霊魂のうちに見出される〈内的光明〉(Inner Light 或は Light within) は,古代印度のウパニシャッドの〈梵〉であり,それ自体万物と一体となる最高の自我である。そしてこの内的光明は,ホイットマンの散文集,「十一月の枝」(November Boughs) (1855) 中の論文, Elias Hicks (エリアス・ヒックス) においてもふれられている〈クェーカーリズム〉(Quakerism) における〈内的衝動〉(Inner Impulse)[22] にも通じ,〈宗教的良心〉(religious conscience) とも〈内なる法〉[23] とも呼ばれるもので,彼の少年時代の宗教的感銘に根ざしているものである。それは〈人間性の道徳的,神秘的部分〉(that moral mystical portion of human nature)[24] である。

人間は〈巨大な最初の無〉(huge first nothing) (Song of Myself) の中から,たゆとう霧と,悪臭を放つ炭素を通って昇り行き,遂に創造の階梯の最上段に立ったのである。彼は意のままに自分の通過した段階を思い起こし,ある意味ではすべての物体,生物を合体することもできるのである。その〈最高の存在〉(supremes) の一つになろうとする要求は飽くことがなく,無休止の前進をつづける。それは〈超自然的〉(supernatural) なものではないが,死によって止まることもない。彼によれば,死も生と同様に前進するものだからである。

このような,超絶的であり,光明の光明であり,多くの宇宙の中心ともなるもの,〈内的光明〉,によって〈時〉はその仲間となり,従容として微笑をもって死に臨むことも可能となる。そして彼の神秘の航海,〈神の海〉(Seas of Cod) の航海は,古来のいくたの神奥な謎を秘めた彼岸を求めて,インドへの航路を,さらにはサンスクリット,ベーダの経典も乗り越えた航路を,進み続けていくのである。

かかる霊妙なる秘密を感得し,最高の実在である絶対者をとらえる努力の大部分は,人間の霊魂と神との合体によって可能となる。それはホイットマン的世界教であり,万有霊魂,霊魂即究極存在の悟りである。

Whispers of Heavenly Death (天界よりの死のささやき) 篇にある詩, A Noiseless Patient Spider (黙黙たる忍耐づよい蜘蛛) (1868-81)では,神秘主義の媒体となる〈瞑想〉(musing) が姿を見せている。霊魂は涯知れぬ空間の中で自由を探究し,結合する世界を求めて蜘蛛のごとくに細い糸を投げかける。

And you O my soul where you stand,
Surrounded, detached, in measureless oceans of space,
Ceaselessly musing, venturing, throwing, seeking the spheres to
connect them,
Till the bridge you will need be form'd, till the ductile anchor
hold,
Till the gossamer thread you fling catch somewhere, O my soul.[25]

(ll. 6-10)

Starting from Paumanok においても,彼の〈瞑想する〉(muse and meditate),恍惚の姿は,生誕の地を

離れ，群集の物音からも遠去かった幽境に見出される。

Or withdrawn to muse and meditate in some deep recess,

Far from the clank of crowds intervals passing rapt and happy,[26]

(ll. 7, 8)

ヘーゲル的な観念弁証法からするならば，現世の矛盾・対立した諸相を，この〈瞑想〉を契機として，絶対者によって精神的に総合するのである。ホイットマンの詩のカタログ的性格も，この日常体験への視点をそらさないという点で有効であった。彼は当時の〈超絶主義〉(Transcendentalism) の文人，エマソン (Ralph Waldo Emerson) (1803–82)，ソロー (Henry David Thoreau) (1817–62) だちとともに，しかもより民衆的に，核心に迫ってその趣きを歌い上げたのである。

×　　×　　×　　×　　×

ホイットマンの場合は，放浪者(ローファー)としての自然との同化体験，さてはつぎに記す戦場体験から，ベルグソン (Henri Bergson) (1859–1941) 流の直観主義による創造的進化，さらには量的，質的次元を越えた仏教哲学的な〈絶対的無〉[27]，〈法悦〉(ecstacy) が，矛盾・対立を総合する機縁となったとも考えられる。カナダの精神病学者，R. M. Bucke の指摘する第三の意識—〈宇宙意識〉(cosmic consciousness) の所有の問題であろう。[28]

ホイットマンと深い類似性の見出される，「わび」，「さび」，「細み」の大詩人，芭蕉は，やはり相対一如，弁証法的な〈純粋〉の把握を志し，「おくのほそ道」の大旅行でも〈万有統一〉の原理を実感的に体得しようとしている。その晩年しきりに説いたという「不易流行」論にみられる〈統一性〉[29] も，ホイットマンのこのような〈第三の意識〉と無縁ではあるまい。「自選日記」(Specimen Days) では，ホイットマン自身，この〈第三の意識〉を時間，空間中における〈絶対的平衡の直観〉(intuition of the absolute balance) として表現し，心眼と精神の根本中心としている。それはあらゆる歴史と時代にわたって，さまざまのものの一切の集積[30] を有する天与の手がかりを見る心眼である。

> There is, apart from mere intellect, in the make-up of every superior human identity, (in its moral completeness, considered as *ensemble*, not for that moral alone, but for the whole being, including physique,) a wonderous something that realizes without argument, frequently without what is called education, (though I think it the good and apex of all education deserving the name)—...[31]

(単なる知性はさておき，あらゆる優れた人間の特性の正体の中には，(単にあの道徳性ばかりでなく，肉体を含めた全人としての，全体として考えたその道徳的完全さの中には、) 議論することなしに，しばしばいわゆる教育もなしに，一つの絶対的平衡の直観を体得するある不思議なものがある。(わたしはそれこそ教育という名に相応(ふさわ)しいあらゆる教育の目的であり極致であると思うのだが)，——……)[32]

Eidólon は第1部で少しくふれたが，ホイットマンの主観的哲学思想を取り扱っている詩である。この "eidólon" は古代哲学から借りた語であり，〈真我〉(real I myself) である。〈予言者〉(the seer) の教示により，宇宙と同様に〈霊魂〉(soul) をもつ各物体の祝いの歌を詩人はうたう。この彼の〈幻霊〉(eidólon) こそは，すべての被造物に内在する〈自然霊魂〉(Nature-soul) の一部であり，究極の真実在である。この詩の中では，個人の本性の死後への連続が暗示されているが，その他〈墓〉の〈表象〉(figure) として〈仮の野営地〉(a temporary camp) を，〈死〉の表象として〈帰らざる巡航の旅〉(no more returning, thy endless cruise)[33] を用いていることとも同趣旨である。この自信は彼の宗教的体験とともに深まり，老人になってカムデン (Camden) の友人たちに問われると，彼はいつも証拠の不在を認めつつ，個人の本性の残存への信仰を表明した。

人間の霊魂が神と合体するためには，通常の認識，理解を越えた，すなわち〈超絶的〉(transcendental) な状態を必要とし，その媒体となるものは前にふれた深い瞑想と神への思慕に外ならない。これは世俗の経験を越えるものである。〈人知〉(human reason) の介入しない境地である。かかる意味合いにおいては，万有神教的と唯一神教的，そして求心性と遠心性の違いはあっても，思想界の革命をもたらし，人間を歴史の

〈主体〉としたカント (Immanuel Kant) (1724-1804), 既述の〈宇宙意識〉を説いたヘーゲル, 〈絶対我〉の実現, 発展に努力したフィヒテ (Johann Gottlieb Fichte) (1762-1814) との密接な関連が見出される。またエマソンほか19世紀ニューイングランドの思想家達の〈超絶主義〉(transcendentalism) の主翼をになうのである。こうしてアメリカ史の "transcendental period" において理念的改革を断行した彼は, 同時にアメリカ文学のチャンピオンともなったのである。

第3部 〈自我〉(Self) の確立—〈自然〉(Nature) の友好性—〈死生観〉(Thanatopsis)

「民主主義展望」(Democratic Vistas) などとともに, Complete Prose Works 1892 に姿をあらわさなかったが, 注目に価する随筆に, My Book and I (私の本と私) がある。この中でホイットマンは, 33歳から35歳の間に自分を支配するようになった特別の願望と確信として, 〈個人性〉(Personality) の表現をあげている。生理的, 感情的, 道徳的, 美的〈個人性〉[34] を, アメリカの重要な精神, 事実のなかで, しかも文学的, 詩的形式においても妥協せず, 明白, 卒直に, かつ包括的に述べるという願いである。

> This was a feeling or ambition to articulate and faithfully express in literary or poetic form, and uncompromisingly, my own physical, emotional, moral, intellectual, and aesthetic Personality, in the midst of, and tallying, the momentous spirit and facts of its immediate days, and of current America—and to exploit that Personality, identified with place and date, in a far more candit and comprehensive sense than any hitherto poem or book.[35]

このような個人性は, 自尊心やエゴイズムとは厳密に区別されるべきもので, ルソーの〈自己愛〉—人間性と徳を生み出す, 自然の感情—の流れを汲むものといえよう。

最高の自我を獲得した〈君自身〉(Yourself)[36] は, 男であれ女であれ, 〈神〉(God) と同格になる。Autumn Rivulets (秋の小川) 篇中の, Laws for Creation (創造の法則) (1860-71) はつぎのようにうたう。

> What do you suppose I would intimate to you in a hundred ways,
> but that man or woman is as good as God?
> And that there is no God any more divine than Yourself?
> And that that is what the oldest and newest myths finally mean?
> And that you or any one must approach creations through such
> laws?[37]
>
> (ll. 8-11)

〈創造〉における神と人との合体がここにみられる。

また, 南北アメリカの統一という偉大な創造的契機から死んでいった戦場の兵士にキリストの面影(おもかげ)を見出す, 死をとおした神と人との合体もある。A Sight in Camp in the Daybreak Gray and Dim (灰色に仄暗い暁の陣営の一光景) (Drum-Taps 篇) の中の一行 (l. 14) である。

> Young man I think I know you—I think this face is the face
> of the Christ himself,[38]

こうしてホイットマンの〈自我〉は, 吠陀(ヴェーダ)[39] の天地開闢の時代より万物と表裏一体をなす〈梵〉として, 〈現象〉対〈本体〉, 〈肉〉対〈霊〉という関係からしてカントの〈超感性的理性〉, エマソンの〈大霊〉(Oversoul) となる。まさしくトロウブリッジ (John Townsend Trowbridge) が「ホイットマン追憶記」(My Own Story of Walt Whitman) で述べているように, ぶつぶつと煮えたつホイットマンの思想は, エマソンによって沸騰されたのである。[40]

> My ideas were simmering and simmering, and Emerson brought them to a boil.

ホイットマンは〈大霊〉の隠喩(メタファー)として Autumn Rivulets 篇の As Consequent, Etc. (結果として生まれ出るもの) などにみられる〈時間の海〉(the sea of Time) という句を用いている。そこから彼自身の〈実在〉(identity) は来り, また絶えずそれに向かって流れ行き, 最後にはそこで〈古き死の流れ〉(the old stream of death) と混り合うのである。

また Miracles (奇蹟)[41] の詩をはじめとして, Starting from Paumanok, Song of Myself, Song of the

Open Road (大道の歌) など,[42] 随所にみられる "miracles" の語は,〈宇宙哲学〉(cosmology) や物理学と共存する心理学説を打ち出したスウェーデンボルグ (Emanuel Swedenborg)[43] (1688-1772) の系統をひくエマソンの,汎神論 (万有神論) 的宇宙観に由来するものと考えられる。

人間が直接神に接近し,ついには神と一体化するという確信の点では,真の神の殿堂は民衆の心の中にこそ建てられるべきであるとした,クェーカー教の始祖フォックス (George Fox) (1624-90) に相通じていたわけである。そしてホイットマンが〈自我〉の不朽不滅を信ずる淵源は,古代インドの神秘思想を要約する霊魂不滅説に示されるといえよう。彼が英訳をとおして読んだ大叙事詩,バガバッドギータは,二王族の王位争いの戦いをえがく哲学的,宗教的詩である。正義を代表するパンダーヴァ族の王子アルジュナと,天の神であり,宇宙万有の大本源であるクリシュナとの美しい会話によって,古代インドの神秘思想が述べられている。クリシュナの説くところによると,人間は感覚世界を超越しないから死を恐れるのであって,それを超越し,絶対なる〈梵〉(自我) に到達すればおのずから生死を超越するのである。[44]

ホイットマンの〈神秘主義〉(mysticism) は,中世の非科学的なものとは異る。また向下的にあらずして向上的性格をもつが故にマックス・ノルダウ (Max Simon Nordeau) (1849-1923) が現代文明の堕落的傾向とともに指摘している,[45] 一種の精神的変質としての神秘主義的思想でもない。広大で健全なアメリカの土壌に培われた〈民主主義的神秘主義〉(Democratic Mysticism) とも名付けられる,剛健な国民性,健全な文明を培うものであった。彼においては,〈民主主義〉は道徳的,倫理的理想であるとともに宗教でもあったのである。彼の Leaves of Grass もある意味では,〈未来の民主主義文学〉(the democratic literature of the future) を確立する意図の実現にほかならない。

> For I say all the core of democracy, finally, is the religious element. All the religions, old and new, are there.[46]

ホイットマンの説いた "Personalism" は〈個人主義〉というよりも,〈個人完成主義〉と訳した方がよい内容をふくむものである。[47] それは彼の Leaves of Grass の計画の全体をおおうものであり,宗教的生活に最高の重要性を認めつつ,男女平等の旗印のもとに個個人の人間完成を期するものである。
この〈平等〉は聖なるものとして,

> O such themes—equalities! O divine average![48]
>
> (Starting from Paumanok, § 10, l. 144)

幾時代をもとおして太陽のもとで歌われる主題である。それはまた,道徳的,社会的良心の涵養をはかりつつ政治に参与するものでもあった。この民主主義的神秘主義は,いかなる時点においても宇宙は完全な存在であり,しかも絶えずより高き秩序の確立へと成長しつづけるという確信に裏付けられる。進歩とは自然の生殖の衝動である創造力が〈必然的にもたらす結果〉(infallible consequence) であるとする彼の理解は,〈自然〉の人間に対する善意,友好性を信ずる楽天性を伴い,エマソンと共に人間肯定の立場をとるのである。また,視点を民主主義の側に移すと,ロマン主義者として〈超絶的民主主義〉(transcendent democracy) という,アメリカの偉大な夢を達成しようとするのである。

彼のこの楽天性,透徹せる〈死生観〉(thanatopsis) にもっとも大きな試練となったのは,1873年1月23日夜の〈中風の発作〉(paralytic stroke) と,同年5月28日の最愛の母の死という,肉体,精神ともごもにこうむった痛烈な打撃であろう。この間の彼の〈心の顕著な動き〉(dominant mood) は,Two Rivulets (二つの小川) の中の詩,Prayer of Columbus (コロンブスの祈り) (1874-81) (Autumn Rivulets 篇) と Song of the Redwood-Tree (アメリカ杉の歌) (1874-81) (Calamus篇) に表明されている。

「コロンブス」に登場する彼は,[49]〈やつれた敗残の老人〉(a batter'd, wreck'd old man) であるが,しかも「神への信仰,法悦を失ってはおらず」(lost nor faith nor ecstasy in Thee),ひたすら神に祈ることによって平安を求める。

> I cannot rest O God, I cannot eat or drink or sleep,
> Till I put forth myself, my prayer, once more to Thee,
>
> (ll. 9, 10)

この〈神〉(God, Thee) として呼びかけられる本体もまた,自然の〈霊魂〉にほかならない。それは嘲笑と困惑の交錯する中でも,大気や空に充満する,影のような,広大,神聖な形象として彼に微笑みかけるの

である。こうして彼の楽天性は不死鳥のように蘇る。沖には無数の船が帆走し，新しき頌歌が彼を歓迎する。

And these things I see suddenly, what mean they?
As if some miracle, some hand divine unseal'd my eyes,
Shadowy vast shapes smile through the air and sky,
And on the distant waves sail countless ships,
And anthems in new tounges I hear saluting me.(50)

(ll. 62–6)

この「コロンブスの祈り」には，G. W. Allen が指摘しているように，いわば〈或種の宗教的信仰〉(some variety of religious faith) による詩人の救済がうたわれている。

これにたいして「アメリカ杉の歌」は，「立ち枯れてゆく巨木の死の歌」(the death-chant of a mighty dying tree) である。この詩には，Allen が指摘しているように，ヘーゲルから派生していると思われる〈哲学的慰め〉(a philosophical consolation) がある。この巨木も〈有意識の実在〉(consciousness, identity) であり，その精霊は，詩人の〈展望〉(Vistas) に入ると，かくされた〈国民的意志〉(national will) であり，〈自然霊魂〉(Nature-soul) の一部でもある。

他のなにものにも依存しないで，自分が自分自身で自分であるという意味のヘーゲルの〈自由〉は，(51) ホイットマンがこの詩の第71行で，

Here heed himself, unfold himself, (not others' formulas heed,)
here fill his time,(52)

とうたっているものであろう。〈自由〉の自己実現の可能性を認識する能力としての〈理性〉，それはこの詩の第58行で，

You unseen moral essence of all the vast materials of America,
(age upon working in death the same as life,)(53)

とうたわれているものであろう。そして，その〈理性〉の成果を歴史のなかで現実化していく力としての〈自由〉。両者はまさに不可分の関係にある。

ヘーゲルは，「矛盾はあらゆる運動と生命性の根源である。」(大論理学 (Logik),(54)「矛盾」) と言っているが，ホイットマンの注目する〈自然が行なう改良〉(Nature's amelioration) では，〈多数悪〉(bad majority) から絶えず普遍的な〈善〉(good) が発展の契機を与えられるのである。

自然の新しい形体をつくり出す計画は，建築家達が当初に計画していたかのように確実に実行される。

When the materials are all prepared and ready, the architects shall appear.(55)

(A Song of the Rolling Earth, 4, ll. 125)

宇宙はより完成された秩序に向う〈律動的で十全なる運動の進行〉(a procession with measured and perfect motion) であり，各物体はそれぞれその所を得ているのである。

How curious! how real!
Underfoot the divine soil, overhead the sun.(56)

(Starting from Paumanok, ll. 20, 1)

と足下の大地，頭上の太陽に，神聖な不可思議の存在を嘆賞するホイットマンは，敬虔的というのとも違うが，心から自然を愛したのである。〈因襲的なもの〉(conventionality) への嫌悪感をはっきりさせた彼は，(57) 自然なるもののすべてに美を見出した詩人であった。彼の〈流動し，併呑する霊魂〉(fluid and swallowing soul) はあらゆる物質の中に貫入し，種種の形相をよそおうのである。地平線の果てまで照らし去り行く金星，広大な穹窿，そして東の空，北寄りに今昇る大角星！彼はこれら無窮の星に熱情とも言える潜在的感情を見出すのである。

「自選日記」(Specimen Days) の Final Confessions—Literary Tests (最後の告白—文学の試金石) では書物の評決を下す人間の霊魂とともに，第一前提として，法則，割符，証明として，書物の批判に霊を注ぐ，大洋，日光，山，そして森などの〈自然〉が考えられている。

(...I have fancied the ocean and the daylight, the mountain and the forest, putting their spirit in a judgement on our books. I have fancied some disembodied human soul giving its verdict.)(58)

生れも，育ちもよい人間なら，戸外の調和，活動，発達という正しい条件のなかに生きるそのことだけで十分である，幸福である，ということを知る。〈自然〉は美と感動と宗教の問題を含むのである。文学は自然に即応し，自然の精神を表現すべきである。この真の〈自然〉，〈自然〉の真の理念が取り戻され，拡大されて，詩に行きわたる雰囲気とならねばならない。

Nature, true nature, and the true idea of Nature, long absent, must above all, become fully restored, enlarged, and must furnish the pervading atmosphere to poems,...[59]

(Democratic Vistas)

人間の思想を心情のとりこにしてしまうような，正式の知性の訓練期間をあまりもたなかったホイットマンの青春は，[60] 大地，海，空への〈感動〉(sensation) でみたされるという幸運にめぐまれた。

要するにホイットマンは，崇高なるものを明確にするというだけではなくて，人間の存在それ自体を一般化し，拡張していって，その身心に自然の崇高性を落ちつかせたのである。[61] From Noon to Starry Night (真昼より星の輝く夜へ) 篇の詩，Thou Orb Aloft Full-Dazzling (御身，上天に輝きわたる円体よ) における太陽の賛美も，その寛大な，物惜しみしない〈すべてのものへの施与〉(impartially infoldest all) の故になされるのである。

〈自然〉[62] と〈人間〉を一体化していく彼のこの新しい方法は，彼以後ではパウンドやエリオット，ローレンス，クレイン等に引きつがれた。このような，彼自身をも含めた一切の事物—自然—の女性的，創造的な一大機能の自覚について，ローレンス (David Hervert Lawrence) (1885-1930) はこう指摘している。

Everything was female to him: even himself. Nature just one great function.

しかし，以上に眺めてきたように，多分に東洋的立場をとって表明されているホイットマンの神秘主義も，人間相互の連関性を強調するときには，上下の階級的感覚や封建制の国土に根ざしたものは一切見当らない。

(Who might you find you have come from yourself, if you could
trace back through the centuries?)

(I Sing the Body Electric, Children of Adam, 篇，§ 7, l. 117)

といった問を発して不滅の生命の連続を訴える彼，その精髄の大方には，米国の北部，中部諸州に生育する芳香ある草，Calamus (カラマス)，の名を題とする詩篇の中で示されているように，慈悲にあらずして友情が期待される。しばしば〈菖蒲〉(Sweet Flag) と呼ばれる，この三尺の高さの葉の茂る自由の天地では，父子の愛にあらずして兄弟愛の中で，人間同志ががっちり手を握り合う。民主主義はたくましい僚友の愛によってのみ維持される。こうして彼の神秘主義は東洋的性格をしっかりと中心に据えながら，強い連帯感の中で発芽し，開花する。それは近代科学の解明の精神の前にもたじろぐものではない。

彼の〈死生観〉(Thanatopsis) にうかがわれる神秘主義は，その完全性を南北戦争における戦争体験，戦争感情のうちに見出したものである。いわばアメリカ最大の危機ともいうべきこの〈内乱〉(the Civil War) の前後を生き抜くことにより，その時代とともに，アメリカの頂点と同時に〈合衆国〉としてのスタートを代表する詩人としての姿勢を確立した。この神秘主義はいわば大同団結的な，民主主義的なものであり，前にもちょっとふれたものである。

彼が現実に直視した呻き叫ぶ戦場の兵士，血の匂いが，草，木，夜の香に入りまじる修羅場の悽惨さ！

There they lie, in the largest, in an open space in the woods, from 200 to 300 poor fellows—the groans and screams—the odor of blood, mixed with the fresh scent of the night, the grass, the trees—that slaughter-house![63]

(Specimen Days: A Night Battle over a Week Since)

将軍だちの公式的，表面的鄭重さとは次元を異にしている，南北戦争のこのような煮えたぎる地獄，暗黒の無数の地獄を現ずる真の戦争の背景は，つぎの文章の表題のように，決して書物に描かれうるものではなかったのである。

Future years will never know the seething hell and the black infernal background of countless minor scenes and interiors, (not the official surface-courteousness of the Generals, not the few great battles) of the Secession war; and it is best they should not—the real war will never get in the books.[64]

(Specimen Days: The Real War Will Never Get in the Books)

宇宙の神秘の中に〈力〉と同様に〈美〉を見出す詩人の心は，〈死〉の不気味さや，〈死〉の影を洗浄してくれるものとして美しい月の光を求める。

Look down fair moon and bathe this scene,
Pour softly down night's nimbus floods on faces ghastly, swollen,
purple,
On the dead on their backs with arms toss'd wide,
Pour down your unstinted nimbus sacred moon.(65)

(Look Down Fair Moon (1865-81), Drum-Taps 篇)

この彼の戦争体験も，抜剣をきらめかす戦士としてではなく，パートタイムの看護夫として得られたことにも彼の幸運があった。彼には，詩作においても〈現在および未来の諸君〉(my present and future readers) に向けられる，常にあくことのない〈共感〉(sympathy) を求める意欲があった。Who Learns My Lesson Complete? (誰が私の教訓を完全に学びとるか) (Autumn Rivulets 篇) などはそれを例証する詩である。(66) その意欲のかなりの部分がこの〈繃帯手〉(wound-dresser) としての活動でやわらげられたようである。膝をかがめて確かな手つきで傷口を包帯する彼は，

One turns to me his appealing eyes—poor boy! I never knew
you,
Yet I think I could not refuse this moment to die for you, if that
would save you.

(The Wound-Dresser, Drum-Taps, 篇，§ 2, ll. 37, 8)

と，見知らぬ気の毒な男のために，代わって死ぬことを拒めぬ気持を吐露し，

砕かれた頭に包帯をし，荒い息づかいの騎兵の首をしらべ，その懸命のいのちの戦いに優しい，美しい死の姿を思う。

(Come sweet death! be persuaded O beautiful death!
In mercy come quickly.) (67)

(Ibid., § 3, ll. 43, 4)

(おいで優しい死よ，どうかうんと言っておくれ，おお，美しい死よ，
助けると思って，来ておくれ，早く。) (68)

彼の沈黙の思索のなかでは，兵士の心をも励まさずにはおかない，生と死と，肉体のための戦いの歌がうたわれ，永遠の〈霊魂〉(Soul) の信仰と確信が披瀝(ひれき)される。

For life and death, for the Body and for the eternal Soul,
Lo, I too am come, chanting the chant of battles,
I above all promote brave soldiers.(69)

(As I Ponder'd in Silence, ll. 16-8)

彼の大気のような，エーテルの軽さを思わせる神秘主義には，スフィンクスの謎も，アルカイック・スマイルの不解明性もない。しかし，これによって我々は，彼の「草の葉」の精霊(スピリット)とともに大地の下の棺の蓋を開き，死人の経帷子(きょうかたびら)の中にまで入りこむ自由を与えられる。彼の神秘主義は，一切の上に厳然としてそそり立ち，あるいはそれらの総てをおおい包み，一切の微粒子の中にまで浸透していく。この点において全く東洋的性格のものでもある。

O vast Rondure, swimming in space,
Cover'd all over with visible power and beauty,(70)

(Passage to India, § 5, ll. 81, 2)

あるいは，

O Death, (for Life has served its turn,)
Opener and usher to the heavenly mansion,
Be thou my God.
.....

Or Time and Space.
Or shape of Earth divine and wonderous,
Or some fair shape I viewing, worship,
Or lustrous orb of sun or star by night,
Be ye my Gods.(71)

(Gods, By the Roadside 篇)

と確信をもって神秘主義の対象，〈神〉，に呼びかけ，〈僚友の神〉，〈死の神〉，〈天体の神〉などを賞揚する歌をうたうもの，それが〈詩人〉である。技師，発明家，科学者達につづいて最後に登場する〈詩人〉，この〈詩人〉は〈神の子〉(Son of God) であり，彼によって〈聖なる三位一体〉(Trinitas divine) は完成される。〈自然〉(Nature) と〈人間〉(Man) はもはや切りはなされることなく合体する。

Finally shall come the poet, worthy that name,
The true Son of God shall come, singing his songs.(72)

(Passage to India, 5, ll. 104, 5)

第4部　自然の創造力と生殖活動

Specimen Days の Boston Common—More of Emerson (ボストン共同所有地－さらにエマソン) においてもうかがわれる，ホイットマンの卒直な〈性〉(Sex) の賛美は，当時のアメリカの清教徒的精神風土においては確かに異常であった。(73)

「私を待つ一人の女」(A Woman Waits for Me) (1856-71) で説かれるように，〈性〉は一切を包含するものである。肉体，霊魂……健康……，果ては愛と美，地上の歓喜……，最後には神をも包含する。それは奥義書の神秘思想の中にみられる，「〈梵〉は一切の胎宮である。」(74) という考え方に通ずるものであり，人間の性のみに限定されない，スケールの雄大なものである。ここにホイットマンは，男も女も〈性〉を承認し，その実体を，その歓喜を知ることを希望するのである。

Sex contains all, bodies, souls,
Meanings, proofs, purities, delicacies, results, promulgations,
Songs, commands, health, pride, the maternal mystery, the seminal
　　milk,
All hopes, benefactions, bestowals, all the passions, loves, beauties,
　　delights of the earth,
All the governments, judges, gods, follow'd persons of the earth,
These are contain'd in sex as parts of itself and justifications of
　　itself.
Without shame the man I like knows and avows the deliciousness
　　of his sex,
Without shame the woman I like knows and avows hers.(75)

(ll. 3-10)

〈自我〉と〈感覚的世界〉を一元的に結合する発展的形式は，(76) 極小と極大の一体化であり，この世界を支える真理はブラフマン＝アートマン，すなわち〈梵我一如〉と呼ばれるものである。ベーダでは男女性の〈マナス〉が生主神として仮想され，この自己分化ないし発展が調和的作用をいとなむのである。原始的な通俗信仰が加わったヒンズー教では，ブラフマー (梵天) が宇宙創造の神として信奉される。この〈生成〉(Werden) と呼ばれる作用は，両性的生殖作用の神霊化なのである。

こうして「草の葉」の詩人は，〈政府〉も〈法官〉もすべて本源的に解明する〈梵〉の自己発展としての〈生殖作用〉を宣揚する。そのためには，内務長官 James Harlan の忌諱による解任も，ボストン地方検事局の発売禁止の処置にもひるまず直進する。(77) 前記エマソンの論理整然たる攻撃と論告にしても，逆説的教訓をあたえる結果にとどまったのである。彼の生活自体はというと，これもまた逆説的に，一生妻帯を忌

避し，完全なる〈母性〉(maternity) の具現者である母ルイザ (Louisa) を敬愛し，the Mother of All=America=Libertad といった所信を抱きつづけるなど，もっともピューリタン的なものではなかったか。

前詩，A Woman Waits for Me, と同様に，Children of Adam 篇にあって，明らかに両性の結合を謳歌している詩に，We Two, How Long We Were Fool'd (私たち二人，何と長い間愚弄されていたことか) (1860–7) がある。男女の性は，地に据えられた嵌となり，揃(そろ)って空中に伸びる槲の木となり，天を飛翔する鷲となる。遂には，その神秘性，エーテル性を拡散して，二個の輝く太陽となり，雲となり，海となり，波となり，雪，雨，冷気，闇となり，宇宙現象の中で混然一体化するのである。〈性〉の自由と歓喜の詩である。

We are what the atmosphere is, transparent, receptive, pervious,
impervious,
We are snow, rain, cold, darkness, we are each product and
influence of the globe,
We have circled and circled till we have arrived home again, we
two,
We have voided all but freedom and all but our own joy.(78)

(ll. 16–9)

ホイットマンの〈性〉の賛美には，〈希望〉，〈歓喜〉といった要素とともに，常にアダムとイブの楽園時代の〈健全性〉が高く掲げられていることは，見逃がすことのできない重要なポイントである。

Kosmos (宇宙) (Autumn Rivulets 篇) の詩では，〈性〉はインド思想味を帯びた神秘主義と結びつけられ，大地の属性ともなる。

Who is the amplitude of the earth and the coarseness and sex-
uality of the earth, and the great charity of the earth, and
the equilibrium also,(79)

(l. 2)

永遠性をもち，ヘーゲル流の一体感をもって総括する〈宇宙〉の存在である。

1872年6月26日に，Dartmouth College の卒業式で彼が読んだ詩，As a Strong Bird on Pinions Free (自由な翼(つばさ)を羽ばたかせる逞(たくま)しい一羽の鳥のように) は，後に4行からなる第1連を加えて，Thou Mother with Thy Equal Brood (御身，平等の子等をもつ御母よ) と改題されている。Prose Works の中で彼が説明しているところによると，これは彼の次の業績，Passage to India, に向かう途次において，Leaves of Grass の意図を一応完成されたものとして表白している詩なのである。海の流れを引き起こし，地球を回転させるほどの，全一的な，抑止しがたい力をもっている〈霊界〉(the Spiritual world) の歌である。

この第5連では，普遍的な母性の象徴の恵まれた懐胎によって，実在の世界と霊魂，肉体の一体化は可能となるとうたわれる。

Emblem of general maternity lifted above all,
Sacred shape of the bearer of daughters and sons,
Out of thy teeming womb thy giant babes in ceaseless procession
issuing,
Acceding from such gestation, taking and giving continual strength
and life,
World of the real—world of the twain in one,
World of the soul, born by the world of the real alone, led to
identity, body, by it alone.(80)

(§ 5, ll. 60–5)

J. E. Miller, Jr. が指摘している，Leaves of Grass の中の〈鳥〉の三種のイメジ (1. 愛の物真似鳥，2. 民主主義の鷹，3. 宗教のつぐみ)(81) を採用するならば，Song of the Universal (普遍なるものの歌)(82) の第3連で，空高く幾度も輪をえがく捕えられない一羽の鳥は，上のイメジの第2と第3の性格を兼ね備えたものといえよう。

Over the mountain-growths disease and sorrow,
An uncaught bird is ever hovering, hovering,
High in the purer, happier air.(83)

(ll. 29-31)

ここにも，ヘーゲル流の究極的勝利の信仰が表明される。

「草の葉」では，Children of Adam 篇ほか，随所において完璧な男性，完璧な女性が求められる。男の体も，女の体も神聖である。そして魂の映像の見える〈自然〉のなかで，万物はひとつになって行進する。彼や彼女が力づよく美しくうたう民主主義の歌！その栄光と理想の実現に向かう熱意は，同時に，時間と空間を越えた〈不滅の生命〉(immortality) への信仰である。

第5部「インドへの航路」(Passage to India)

1876年に刊行された「草の葉」第6版（2巻物）の Two Rivulets の序文で，ホイットマンみずから述べているように，Passage to India は〈死と永生の歌〉(chants of Death and Immortality) である。それは過去，現在の一切の作品の総仕上げであり，それらの終着駅としての機能を果すものである。(84) その長い脚注でも記されているように，この Passage to India は，彼の詩群にたいして一種の結尾（エピログ）の位置を占めるのである。

スエズ運河の開通，太平・大西両洋の海底電線の敷設により，詩人の夢はインドを媒体として，アジアの神話，寓話の中に，そして未来を啓示する意図をひめた楽園に遊ぶ。彼の〈霊魂〉は，さらに〈神の海〉(the seas of God) への船出を敢行するのである。彼が心友トローベル (Horace Traubel) に語ったところによると，この詩では彼の究極的自我が描き出され，つぎつぎに離脱する進化の主旨が語られる。〈宇宙的目的〉の解明が試みられるのである。(85)

1871年から1831年までの10年の歳月を閲（けみ）して彫琢（ちょうたく）された，9連，255行に及ぶこの長詩，「インドへの航路」，を各連をおって解明することにより，筆者のこのまとまりの悪い論旨の辻褄を合わせることにしたい。

〔第1連〕〈旧世界〉(the Old World) と〈新世界〉(the New World) が対比され，「現在は過去の成長せるもの」(For what is the present after all but a growth out of the past?) と説かれる。

過去は常に現在に生き，未来を生き抜く力と契機を与えるものであることは，O Living Always, Always Dying (おお，常に生き，常に死して)，Whispers of Heavenly Death (天界よりの死のささやき) 篇でもうたわれている。現在の各瞬間は，果てしなき過去における〈完成〉(consummation) から発展してきた〈完成〉であり，同時に果てしなき未来の〈完成〉の下作りとなる。

〔第2連〕アジアの〈神話〉(the myths)，〈不死の寓話の塔〉(Towers of fables immortal) がうたわれ，「いろいろな種族，隣人たちの結婚の必要」(The races, neighbors, to marry and be given in marriage,) が説かれる。

〔第3連〕スエズ運河，〈巨大な浚渫機（しゅんせつき）〉(the gigantic dredging machines)，太平洋（パシフィック）鉄道などの近代文明の壮観。そして〈ララミーの草原〉(the Laramie plains)，〈ネバタ山脈〉(the Nevadas)，〈清らかなタホー湖〉(the clear waters of lake Tahoe) などの自然の広大。(86) そして〈ヨーロッパとアジアの間の道〉(the road between Europe and Asia) ができる。

〔第4連〕「すべての歴史の盛衰にそって」(Along all history, down the slopes)，航海する。〈アメリカの誕生〉(thou born America) と〈円体の世界の完成〉(thou rondure of the world at last accomplish'd)。

In Cabin'd Ships at Sea (海上の客船で) (Inscriptions 篇) においても，「草の葉」は〈小さな帆船〉(my little bark) として，茫漠とした神秘の海を走りつづける。

〔第5連〕宇宙の諸事象，〈わたくしたちの愛〉(our affections)。そして〈神の真の息子〉(the true son of God) たる〈詩人〉(the poet) の出現により，「自然と人間は離れがたく合体する」(Nature and Man shall be disjoin'd and diffused no more,) のである。

彼の，この〈宇宙的，叙情的インスピレーション〉(cosmic lyric inspiration) の白熱の輝きは，Salut Au Monde! (世界万歳！) や A Song of the Rolling Earth (回転する地球の歌) の詩群にも一貫するものである。

〔第6連〕「大陸の，風土の，そして海洋の結婚」(the marriage of continents, climates and oceans)。ヨーロッパとアジア，アフリカ，そしてそれらの大陸と〈新世界〉との結合 (Europe to Asia, Africa join'd, and they to the New World,)。霊魂は〈アレキサンダーの物語〉(the tale of Alexander)，〈古く神秘的な梵〉(old occult Brahama)，〈優しく若い仏陀〉(the tender and junior Buddha)……などの思い出の中を歩きまわる。〈みずから幻影を追い求める巨大な幻影〉(gigantic, visionary, thyself a visionary,) の自覚。それは〈神の定めたもうた機会〉(God's due occasion) がくれば発芽し，花を咲かす。

Pioneers! O Pioneers! (開拓者よ！おお，開拓者よ！) (Birds of Passage 篇) にみられるような，時間と空間を通しての，人間種族の〈進化〉と〈移住〉の物語りでもあろう。また，この霊魂の自由なる飛翔(ひしょう)は，カントの先天(アプリオリ)的な能力—自然の対象を，経験をつくりあげていくものの形式—を思わせる。自発的判断，構成であるが故に主観的であり，同時に，存在する経験や対象の形式的総合としては客観的なものである。

〔第7連〕〈原初の思念〉(original thought) への霊魂の航海。理性の初期の楽園に帰る。〈無垢(むく)な直観〉(innocent intuitions) を目ざし，ふたたび〈美しい創造〉(fair creation) を果たしながら……。[87]

彼は原型的な人間であり，単純，普遍的な性格をもち，両性的である。イブの取り出されない〈原始のアダム〉(the primordial Adam) である。しかも，また，呪われ，恥辱にみち，不満足で，激情的な〈新しいアダム〉(the new Adam) である。[88] こうして彼は，不分明な，区別されざる〈自己〉(self)，〈合一性〉(Unity) を求め，それによって〈完成〉の望みを達しようとする。

〔第8連〕「霊魂は船に乗り」(We too take ship O Soul,)，〈神の歌〉(our song of God) を楽しく自由にうたう。神と自然の驚異，そして〈時間と空間と死〉(Time and Space and Death) の問題は「潮のごとくに流れる」(like waters flowing) 海を渡りおえ，「航海が終った」(the voyage done) 時点において，〈愛〉は完成し，宇宙の神霊たる〈超絶者〉(Thou transcendent) とわたくしの〈霊魂〉は，「兄弟の愛をもって合体する」(The Younger melts in fondness in his (=the Elder Brother's, 筆者注) arms.)。

〔第9連〕サンスクリットの聖典やベーダの秘奥(ひおう)を探り究め，今や霊魂は〈インドを超えた航路〉(passage to more than India) につく。太陽と月，すべての星晨，狼星(ろうせい)や木星へ向う船路でもある。だがどんな勇敢な探究の喜びに充たされても，それが〈神の海〉でなされるかぎり安全である。遠く，遠く，さらに遠く霊魂の船は進出するのである。

O my brave soul!
O farther farther sail!
O daring joy, but safe! are they not all the seas of God?
O farther, farther, farther sail![89]

(§ 9, ll. 252–5)

〔結論〕〈霊魂〉(Soul)—楽天的な自由詩人，ホイットマン

〈霊魂〉(Soul) とは，自然の生物に形と連続をあたえ，人間をして幸福と不死に向わせる神秘的なものである。それは回避し得ない〈促進〉(promotion) と〈変成〉(transformation) の法である。自然の法則，その生殖本能と不思議に結びつくものである。それは万物に〈遍在し〉(omnipresent)，「永久に溶解状態にある沈澱物」(float forever held in solution)[90] である。〈個人〉(individual) の誕生とともに，その一部が放出され，その体内に〈本性〉(identity) を付与するのである。

Something long preparing and formless is arrived and form'd in you,

(To Think of Time, § 7, l. 74)

(何かしら長いこと準備されてきた形のないものが到着し，あなたのうちに形づくられる。)

それ以来その〈個人〉は，何所へ行こうと，彼の出会うものの一部となり，またそれらは彼の一部となる。[91]

肉体に影響を及ぼすものは，病気であれ，熱情，慈善であれ，すべて〈霊魂〉に影響する。〈霊魂〉の実体は成長をとおしてのみ確立されていくのである。

前にも紹介した Starting from Paumanok の詩においては，彼一流の否定による肯定の哲学が披露され

る。即ち形象の詩は精神的詩となり，亡びゆく肉体の詩は，〈霊魂〉の不滅を称えるのである。

I will make the poems of materials, for I think they are to be the
　　most spiritual poems,
And I will make the poems of my body and of mortality,
For I think I shall then supply myself with the poems of my soul
　　and of immortality.

(§ 6, ll. 71-3)

この詩の § 10 では，詩人の果す三つの偉大な分配について語られる。それは〈愛〉と，〈民主主義〉と〈宗教〉である。しかしてこの第三の宗教は，その偉大さにおいて包括的であり，より光彩陸離たるものである。

My comrade!
For you to share with me two greatness, and a third one rising
　　inclusive and more resplendent,
The greatness of Love and Democracy, and the greatness of Reli-
　　gion.

(ll. 131-3)

啓蒙主義以来，悪の問題が哲学の主要な問題となっていた18世紀に，悪からの人間解放を目ざしたルソーと同様に，ホイットマンも一貫して人間の自由を追求した。自然の人と自由な人とは相対的な存在ではなく，一個の独立した存在である。

〈肉体〉の自由は上に述べた〈民主主義〉により，〈心〉(heart) の自由は〈愛〉によって得られる。ルソーは，その著，「社会契約論」(The Social Contract) 第3編において，古代民主制を「自由」から「自由の喪失」へ，そしてそこから「自由の回復」へという三段階の発展方式によって，弁証法的に理解している。〈愛〉は〈霊魂の流出せるもの〉(efflux of the soul) とホイットマンは説明する。それは人間の相互牽引を促し，幸福をもたらすものである。そして，〈肉体〉，〈心〉につづいて〈霊魂〉の自由は，〈宗教〉をとおして得られるものとする。

Inscriptions (銘詩) 篇にも，What is a man anyhow? とか，To be in any form what is that? といった形而上学的，本体論的疑問や，〈自己〉，〈同一性〉の主題を掲げた彼も，いわば〈予言者的，詩的な〉解答を試みているのであり，偉大な哲学者，宗教家たらんとすることは，彼の意図ともはずれている。

ホイットマンの人間同志の国際的な連帯感，そして時間，空間を越えた〈共感〉(Sympathy) をひたすらに乞い求める態度については前にもふれたが，一見奇異であり，また神秘的印象を強める。しかし，この彼の訴えが自明のものとして受けとられるときに，彼の〈死生一如〉の諦観，そして〈死〉を越えて進んで行く〈霊魂〉の〈不滅性〉への信仰的予言が実現されるのであろう。

I have somewhere surely lived a life of joy with you,(92)

(To a Stranger, l. 3)

(私はきっとどこかで，あなたと共に楽しい生活をしたことがある。)

I am to wait, I do not doubt I am to meet you again,

(Ibid., l. 9)

(私は待っている。あなたに再び会うことを疑わないで，)

And it seems to me if I could know those men I should become
　　attached to them as I do to men in my own lands, (93)

(This Moment Yearning and Thoughtful, l. 4)

ギリシア悲劇をとおしてギリシア精神をとらえたというヘーゲルと同様に，ホイットマンの思索も単なる楽天的合理主義ではない。人類の目に見えざる基礎と結合力を永久の真実として，現世の人間の運命，矛盾，不合理とたたかいながら，その克服を目ざすのであり，そのための「草の葉」の詩歌でもあった。

ホイットマンは常に発端を示し，門戸を示し，前進を促す。そのための愛を，インスピレーションを惜しみなく与える。だからその〈無始無終の経典〉，「草の葉」，をとおして，彼の人間にふれ，彼と手をつないで

いれば十分なのであり，彼もそれ以上を期待しない。哲学的，科学的探究，そしてもろもろの近代的改善をも彼は拒否しない。否，歓迎するであろう。人間の不死の〈霊魂〉は自分の課する〈紀律〉(discipline) 以外のものに服してはならぬことを堅く要請する。特定の〈信条〉(formula) にもこだわらない。どれを選ぼうと，人類の前進する方向は，いずれは〈生〉と〈死〉が終熄(じゅうそく)する瞬間に〈生〉が出現する無限の道程である。しかも彼は，それが堕落にあらずして向上，崩壊にあらずして創建であることを楽天的に明察し，予言する。彼こそは，世界の全容積を示し，未来を充塡(じゅうてん)する詩人であり，人類に希望と勇気を与える詩人である。

知識に偏重し，〈不信仰的〉(infidelistic) であった当時の社会風潮にたいし，彼は〈人間天性の情〉(Nature) の存続を期待し，「友誼は世界を支配する。」(Friendship rules the world.)[94] という諺の究極的な，賢明な含みを説くのである。地上のすべてが向っても刃の立たない，堅固な，〈新しい僚友の都市〉(the new city of Friends) の建設，それが〈奇蹟〉(miracles) 以外の何物も知らない彼の夢であった。

(注)

(1) Harold W. Blodgett and Sculley, *Leaves of Grass*, Comprehensive Reader's Edition, p. 192
(2) Ibid., p. 17
(3) Ibid., p. 52
(4) Ibid., p. 121　Calamus 篇にある。
(5) Ibid., p. 128
(6) Emory Holloway, "Inclusive Edition" of *Leaves of Grass*, 526
(7) Floyd Stovall, *Walt Whitman*, p. xv
(8) 彼は精神や情緒よりも物質に対してより〈適合性〉(affinity) を見出し，その哲学の〈母体〉(matrix) は感覚と不即不離となり，その信仰の〈規範〉(canon) は自然の中に見出される。
Ibid., p.xxxvi
(9) 多田裕計著，芭蕉　その生活と美学 (毎日新聞社刊)，p. 36
(10) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 8
(11) Richard Chase, *Walt Whitman*, University of Minnesota Pamphlets on American Writers No. 9, p. 20
(12) Blodgett and Bradley. op. cit., p. 80
(13) Ibid., p. 35
(14) Chase. op. cit., p. 21 (in his remark to his Camden friends in 1889)
(15) 多田裕計著，前掲書，p. 194
(16) 国文学解釈と鑑賞　芭蕉研究総覧，第32巻第4号 (至文堂発行)，p. 42
(17) 最新国語総合便覧 (中央図書出版社刊)，p. 147
(18) 清水安治著，ホキットマン新研究 (東京堂，昭和12年11月15日刊)，p. 7
(19) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 419　Autumn Rivulets 篇
(20) Gay Wilson Allen, *Walt Whitman Handbook*, p. 198
(21) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 235　Birds of Passage 篇の詩，「君に」
(22) 清水安治著，前掲書，p. 7
Floyd Stovall, *Walt Whitman Prose Works 1892*, volum II, *Collect and Other Prose* の p. 653, l. 149 に "...the light that was in him, the man Elias Hicks—" とある。
(23) Ibid., p. 639, l. 472
(24) Ibid., p. 644, ll. 577, 8
(25) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 450
(26) Ibid., p. 15
(27) 玉川児童百科大辞典，10 道徳・哲学・宗教，p. 281
(28) Stovall, op. cit., (注7)，p. xiv この頁の脚注では，神秘主義を唱導し，奇蹟を叫ぶ想像力，信仰，理想主義，〈霊性〉(spirituality) の諸特性を包含するものとして，ホイットマンの〈感覚的諸特性〉(sensuous qualities) があげられている。
(29) 多田裕計著，前掲書，p. 90
(30) 彼を産み出した時代と新大陸の地域性が，野蛮と文明，自然と人間，破壊と創造，死と生を同時に賦与

し，実感せしめる〈混合肥料〉(compost) となった。また，善と悪，法と衝動，理性と信仰といった古来の二律背反的存在の調停も考えられている。

(31) Floyd Stovall, *Walt Whitman Prose Works 1892*, volume I, *Specimen Days*, pp. 257, 8
以下，カーライルには欠けていた要素を挙げて，つぎのように続いている。彼の〈直観〉(intuition) の指向するものがうかがえる注目すべき文章である。
...an intuition of the absolute balance, in time and space, of the whole of this multifarious, mad chaos of fraud, frivolity, hoggishness—this revel of fools, and incredible make-believe and general unsettledness, we call *the world*; a soul-sight of that divine clue and unseen thread which holds the whole congeries of things, all history and time, and all events, however trivial, however momentous, like a leash'd dog in the hand of the hunter. Such soul-sight and root-centre for the mind—mere optimism explains only the surface or fringe of it—Carlyle was mostly, perhaps entirely without.

(32) 杉本喬訳，ホイットマン自選日記　下 (岩波書店刊)，p. 156

(33) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 503
Now Finalè to the Shore (今ぞおくる，岸辺への終曲を)，Songs of Parting (別離の歌) 篇，ll. 9, 10

(34) 木村艸太著，民主主義展望 (ホキットマン全集　第5巻) (日本読書組合，昭和23年6月10日刊)，p. 128

(35) Stovall, op. cit., volume II, p. 714, ll. 63-9

(36) ホイットマンは，"...man is sovereign of his individual self..." と述べている。

(37) Blodgett and Bradley, op. cit., pp. 386, 7

(38) Ibid., p. 307

(39) 知識の意。転じて聖典の意。インド古代のアールヤの神々に捧げた歌を集めた聖典。広辞林，三省堂刊

(40) 清水安治著，前掲書，p. 33

(41) 1856年刊の「草の葉」では，"Poem of Perfect Miracles" として出ていた詩。1855年以前のノートに彼はつぎのように書いている。
We hear of miracles.—But what is there that is not a miracle?

(42) 代表的な例をつぎに記す。
And I will thread a thread through my poems that time and events
　　are compact,
And that all the things of the universe are perfect miracles, each
　　as profound as any.
(Starting from Paumanok, § I2, ll. 170, 1)
Seeing, hearing, feeling, are miracles and each part and tag of me
　　is a miracle.
(Song of Myself, § 24, l. 523)
I think heroic deeds were all conceiv'd in the open air, and all
　　free poems also,
I think I could stop here myself and do miracles,
(下線は筆者)　(Song of the Open Road, § 4, ll. 49, 50)

(43) 彼の教説は，万物に存する主要な因子を認め，その本質を解読することによって相互の〈交信〉(correspondence) をはかる。
The underlying principle is that paricular entities and manifestations, while interrelated by casual determination, also symbolize essential forces and factors which are organized on a different plane of their own. Thus full inductive discovery involves the deciphering of symbols, usually called "correspondence." Things belonging with other things represent thoughts, and vice versa.
(Encyclopedia Americana 26, p. 125)

(44) 清水安治著，前掲書，pp. 26, 28, 29
「我れは一切生類に於て平等なり，我れに於て憎むべきものなく，また殊に愛すべきものなし，されど，信念を以て我れを拝するものあらば，彼らはわれに住し我れまた彼らに住す。」(王明王密品 29)
「梵となりて自我を平和にしたものは憂へず，望まず，一切有類に平等にして，我れに於ける最高の信念を得。」(離欲品 54)

(45) その著，「堕落論」(Entartung: Degeneration) で論じている。

(46) *Democratic Vistas, Prose Works* (Philadelphia: David Mckay, n. d. 1892), 220
(47) Allen, op. cit., p. 191
(48) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 21
(49) コロンブスと彼，ホイットマン，との〈同一性〉(identification) を明らかにしながら，彼に心酔せる女性，ギルクリスト夫人 (Mrs. Anne Gilchrist) はつぎのように述べている。
You too have sailed over stormy seas to your goal—surrounded with mocking disbelievers—you too have paid the great price of health—our Columbus. (Harned, 108)
(50) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 422
(51) 沢田章著，ヘーゲル (人と思想　17)，清水書院，pp. 115, 6
(52) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 209
(53) Ibid., p. 208
(54) 1812年から1816年にかけての著述になるもので，ヘーゲルの最も重要で，最終的な哲学論文である。
(55) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 224 (回転する地球の歌)
(56) Ibid., p. 16
(57) 無気力で化石化された制度を相殺(そうさい)するために，改革者，革命者の単刀直入な提訴を歓迎した彼は，つぎのように記述している。
酒本雅之編注，Democratic Vistas, 篠崎書林刊，p. 31
The eager and often inconsiderate appeals of reformers and revolutionists are indispensable, to counterbalance the inertness and fossilism making so large a part of human institutions.
(58) Stovall, op. cit., volume I, p. 294
(59) Stovall, op. cit., volume II, p. 416
(60) ブルックリン公立学校の在学 (1825–30)
(61) *Whitman A Collection of Critical Essays* の p. 174 で Josephine Miles が指摘している。
(62) ルソーの説く〈自然〉は，ときには，原始的な状態という意味での自然史的自然概念として，また人為的堕落に対して，直接神に由来する素朴と調和を意味する神学的自然概念として，また時には人間本来の幸福もしくは完全に向かう傾向としての心理学的概念としての自然としても使われおり，決して一様ではない。(中里良二著，ルソー (人と思想　14)，清水書院刊，p. 132)
(63) Stovall, op. cit., p. 365
(64) Ibid., p. 369
(65) Blodgett and Bradley, op. cit., pp. 320, 1
(66) Ibid., p. 395
And that my soul embraces you this hour, and we affect each
other without even seeing each other, and never perhaps to
see each other, is every bit as wonderful.
(Who Learns My Lesson Complete?, l. 22)
(67) Ibid., p. 310
(68) 鍋島能弘・酒本雅之訳，草の葉　中 (岩波書店刊)，p. 296
(69) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 2　1871 年の詩
(70) Ibid., p. 414, Autumn Rivulets 篇
(71) Ibid,. p. 269, 第 2 節と第 6 節。1871–81 年の詩
(72) Ibid., p. 415
(73) ロレンスによると，アメリカの Pilgrim Fathers たちは，人間の創造的生命力を意志によって支配しようとする試みを行なった。そのためアメリカの democracy は，ヨーロッパの専制君主制度の「否定」から生まれたのである。"Their liberty is a liberty of THOU SHALT NOT." と彼は結論している (高校クラスルーム，旺文社，昭和43年 7 月 1 日刊，p. 12)
(74) 清水安治著，前掲書，p. 31
「パラダ族の王子 (アルジュナ) よ，わが胎宮は大梵なり，我れは其の中に胎子を安けり，一切生類の発生はそれより来る。一切の胎に於て生ずる形相の大胎宮は梵なり，我れは其の種子を伝ふる父なり。」(三徳分別品，3，4)
(75) Blodgett and Bradley, op. cit., pp. 101, 2
(76) Passage to India の第 8 連では，宇宙の霊なる神と自我の霊の合体を兄弟の会合の悦びとして述べて

いる。

(77) 1882年，ホイットマンが63歳のおり，Osgood 社より出版された LG 第7版にたいして，ボストン地方検事局は猥褻文学の故をもって州内の発売を禁止した。前記 A Woman Waits for Me や，To a Common Prostitute の詩の削除を慫慂されている。

(78) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 108, (1860–81)

(79) Ibid., p. 392, (1860–7)

(80) Ibid., p. 458, (1872–81)

(81) James E. Miller, Jr., *Walt Whitman*, 1962, p. 124

(82) この詩も，1874年3月20日，Tufts College の卒業式に招請されたことにこたえて，つくられたものである。Birds of Passage (渡り鳥) 篇にある。

(83) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 227

(84) Stovall, op. cit., vol. II, pp. 464, 5

..., I keep my special chants of death and immortality to stamp the coloring-finish of all, present and past. For terminus and temperer to all, they were originally written; and that shall be their office at the last.

(85) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 411

There's more of me, the essential ultimate me, in that than in any of the poems. There is no philosophy, consistent or inconsistent, in that poem...but the burden of it is evolution—the one thing escaping the other—the unfolding of cosmic purposes.

(86) Basil De Selincourt は，その著 *Walt Whitman　A Critical Study* の124頁でつぎのように述べている。

The extraordinary patience he displays, his willingness to appear trite, foolish, extravagant, crude, monotonous, indecent, are really the measure of the largeness of his design, of his consciousness of the space to be filled, of the scale and system required of him in the balance, the compensations, the proportion of his work.

〈自然〉そのものである「草の葉」を誕生させるためには，脚韻も律格もない，純粋の自由詩の詩形をとらざるを得なかった。ここにうかがわれる〈自然〉は，たとえば Song of Myself (私自身の歌) にある次の2行に見られるような，極くありきたりの景物，実在の一連のカタログでもある。彼の表現力に示される異常なまでの忍耐，愚直，粗野の性向は，彼の計画の偉大性，その充たさるべき空間の博大を語るものにほかならない。

This is the grass that grows wherever the land is and the water is,
This is the common air that bathes the globe.

(§ 17, ll. 359, 360)

(87) 鍋島・酒本訳，前掲書　下，p. 111

(88) Stovall, op. cit., p.xix

(89) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 421

(90) Ibid., p. 162

Crossing Brooklyn Ferry (ブルックリン渡船場を渡って)，Calamus 篇，§ 5, l. 62

I too had been struck from <u>the float forever held in solution,</u>

(下線は筆者)

(91) Ibid., p. 364

There Was a Child Went Forth (出歩く一人の少年がいた)，Autumn Rivulets 篇，ll. 2–4

And the first object he look'd upon, that object he became,
And that object became part of him for the day or a certain part
　　of the day,
Or for many years or stretching cycles of years.

(92) Ibid., p. 127　Calamus 篇，(1860–7)

(93) Ibid., p. 128　Calamus, 篇，(1860–81)

(94) Stovall, op. cit., volume II, p. 532　Friendship, (The Real Article.)

(昭和47年1月12日受理)